ドイツの図書館におけるデジタル化と グローバル化の先進的な取り組み

ドイツ・スタディーツアー報告会&ワークショップ

日 程 2010年2月4日(木) 15:00~17:45

場 所 東京ドイツ文化センター(東京)

主 催 東京ドイツ文化センター

情報管理 53(1), 041-044, doi: 10.1241/johokanri.53.41 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.53.41>)

2009年11月22日から29日にかけてドイツ文化センターはドイツの図書館を巡るスタディーツアーを実施した。スタディーツアーには日本の大学図書館、研究機関の図書館員を中心に11機関12名が参加(図1)し、ドイツの5つの図書館を訪問(図2)し、日独それぞれで実施されているさまざまなプロジェクトについての情報交換、意見交換を行った。ツアー

の成果を報告することを目的として報告会&ワークショップが開催されたので、以下にその内容を報告する。

2月4日に開催された報告会&ワークショップには85名が参加した。ドイツ文化センターのクリステル・マーンケ図書館長の開会挨拶に続き、第1部では3名のツアー参加者からスタディーツアーの全体報告がなされ、第2部ではツアー参加者が同一会場内で3グループに分かれ、ドイツで実施されているプロジェクトの中から各自が興味を持った主なトピックを紹介するワークショップが実施された。

第1部 全体報告

全体報告ではドイツの図書館事情、今回のスタディーツアーの概要が報告された。

国立情報学研究所の小林から、ドイツは教育・文化行政を国ではなく州が所管していることから、中央図書館機能もいくつかの機関で分担される分散型システムであること(図3)、また、国家規模の学術図書館、重点領域を扱う中央専門図書館、大学図書館、公共図書館のそれぞれの状況について説明があった。

科学技術振興機構の堀内、放射線医学総合研究所の石田からは、ツアーの概要およびドイツにおける学術情報流通の革新への取り組みについて紹介があった。内容を要約すると以下の通りとなる。

ツアーでは各図書館が実施しているデジタル化、

参加機関	
北海道大学附属図書館	国立情報学研究所
東北大学附属図書館	宇宙航空研究開発機構
筑波大学附属図書館	物質・材料研究機構
一橋大学附属図書館	放射線医学総合研究所
京都大学工学研究科	科学技術振興機構
九州大学附属図書館	

図1 スタディーツアー参加機関

図2 スタディーツアー日程および訪問先

ドイツ刊行物収集コンソーシアム (刊行年代別に収集保存事業を分担)		
分担年代	担当館	所在地
1450～1600年	バイエルン州立図書館	ミュンヘン
1601～1700年	アウグスト大公図書館	ヴォルフエンビュッテル
1701～1800年	ゲッティンゲン大学図書館	ゲッティンゲン
1801～1870年	フランクフルト大学およびゼンケンベルク図書館	フランクフルト
1871～1912年	プロイセン文化財団ベルリン国立図書館	ベルリン
1913年～	ドイツ国立図書館	ライプツヒ、フランクフルト、ベルリン

図3 ドイツにおける刊行物の収集

アーカイブ、機関リポジトリ、オープンアクセス等に関するプロジェクトについて説明を受け、意見交換を行った。日本の参加者も、自身関わっているプロジェクトについて発表を行った。ドイツにはさまざまなプロジェクトが存在するが(表1)、その特徴としては政府(国、州)、EU、あるいはファンド機関からの助成に基づいて実施している期間限定のプロジェクトであること、つまり図書館の運営そのものとは予算が別立てになっていることが挙げられ

表1 ドイツで実施されている主なプロジェクト

1. デジタル化 MDZ : Munich Digitization Centre Google Book : 17～19世紀資料のデジタル化 CONTENTUS : マルチメディア・データの統合保存方法の研究開発 GetInfo/PROBADO : 各種科学技術情報(非テキストデータ)の統合検索技術の研究開発 IMPACT : OCRデータの品質改善方法の研究開発
2. アーカイブ化 kopal : 長期保存・アクセスのためのシステムインフラの研究開発 nestor : 科学情報の長期保存に関する研究開発 PARSE.Insight : 長期保存に関する調査研究
3. リポジトリ PEER : ライブラリ、リポジトリ、学術出版社のコミュニティー DRIVER/COAR : グローバルなリポジトリインフラ、ネットワーク化の調査、研究開発
4. ポータル、ネットワーキング EUROPEANA : EU電子図書館 DDB : ドイツ・デジタル・ライブラリ ViFas : 仮想専門図書館 EZB : 電子ジャーナル図書館 Vascoda : 総合学術検索サイト GoPORTIS : 専門図書館共通ポータル(実施機関: TIB, ZB MED, ZBW) GetInfo : 科学技術総合ポータル(実施機関: TIB, FIZ)
5. オープンアクセス OAPEN : EUのオープンアクセス推進ネットワーク OpenAIRE : EUにおけるオープンアクセスの共通基盤開発、推進 DINI : ドイツのオープンアクセス推進ネットワーク SCOAP3 : 高エネルギー物理学研究分野におけるOAの推進 GMS : 医学中央図書館におけるオープンアクセスの推進
6. e-Science, e-Research eSciDoc : マックス・プランクデジタル図書館が提案する研究所の新しい研究情報インフラサービス

る。担当者も専任の専門家を雇っており、恒常的な図書館業務担当者とは別である。また、一つのプロジェクトを一つの図書館のみで実施することはほとんどなく、複数の図書館が連携してプロジェクトを実施している。民間の企業が参加しているものもある。EUとしてのプロジェクトも多く、インターネットによるボーダレス化が見られる。

(国立情報学研究所 小林廉直,
放射線医学総合研究所 石田敦郎,
科学技術振興機構 堀内美穂)

第2部

グループA

「図書館の可能性：デジタル化・保存・公開・連携への取り組み～Not just Scan! 文化遺産から最新データまで～」というテーマのもと、3つのセッションを行った。「セッション①：科学技術データのデジタル化～EU、ドイツでの事例紹介を中心に」では、北海道大学附属図書館の磯本より日本ではあまり見られない「科学技術データ」のデジタル化について、PARSE.Insight, kopal, GetInfo等のプロジェクトの事例紹介、その問題点や必要性について報告された。「セッション②：所蔵資料を活かし、情報を伝える」では、バイエルン州立図書館の所蔵デジタル化を中心に報告が行われ、古典書籍のデジタル化、近現代資料の大量デジタル化、提供技術の導入といった日独の取り組みについて筑波大学附属図書館の徳田より発表があった。「セッション③：文化を保存する：

写真1 グループAの様子

デジタルデータの長期保存問題を中心に」では、全ヨーロッパの文化遺産を世界に発信し後世に残そうというEUのプロジェクトであるEUROPEANAとそのドイツ版DDB、さらにデジタルデータの長期保存、BornDigitalなデータの保存問題に関するドイツでの取り組みが東北大学附属図書館の渡邊から紹介された。

(北海道大学附属図書館 磯本善男,
筑波大学附属図書館 徳田聖子,
東北大学附属図書館 渡邊愛子)

グループB

「ポータル・リポジトリ・オープンアクセス～ドイツの現在、日本のこれから～」というタイトルで3つのセッションが行われた。

「セッション①：ドイツにポータルがある必然性！～主題分担による合理的コレクション構築という背景」では、「特別収集領域」という、機関ごとに主題を分担してコレクションを構築しているユニークなドイツの取り組みと、またその収集資料を電子化して提供する仮想専門図書館の、研究データをダウンロードできる等の多様な機能の紹介がなされた。また、数多くある仮想専門図書館を一括して検索することができるポータルvascodaが説明されたが、このようなポータルの存在は、日本の聴講者の関心もとても高いようで、多くの質疑応答がなされた。発表者は京都大学工学研究科地球系図書室の坂本であった。

「セッション②：リポジトリのネクストフェイズ：PEER, PubMan, COARの事例から」では、リポジトリ関連のプロジェクトとして、出版社・研究者・図書館のコラボレーションを図るPEER、リポジトリソフトウェアのPubMan、オープンアクセスリポジトリ連合COARの3事例が九州大学附属図書館の星子から紹介された。これら事例の考察により、日本において、リポジトリを構築初期の現段階から一歩前進させるために重要な要素として、「組織や利害関係の枠を超

えた連携体制」、「画像や実験データ等リポジトリがカバーする領域の拡大」、「長期的運用を視野に入れたマネジメント」が挙げられた。

「セッション③：オープンアクセスの持続を支えるもの：ドイツにおける取り組みを参考に」では、一橋大学附属図書館の菅原がゲッチンゲン大学図書館の多岐にわたるオープンアクセス戦略、高エネルギー物理学分野のオープンアクセス化を目指すSCOAP3、ドイツにおける医学分野のオープンアクセス支援、ポータルを提供しているGerman Medical Scienceを紹介した。またこれら活動の中からドイツにおいては、研究成果のオープンアクセス化を目指して、館種の違いを超えた「連携」が行われていること、研究者コミュニティに対する「サポート」があること、オープンアクセスを推進する活動に「多様性」があることを発表した。

グループBのセッションに共通するキーワードは「連携」であった。国を超えた図書館との、あるいは出版社や研究者コミュニティとの連携。学術情報の流通がグローバルになった今日、より広範な連携がわれわれには必要となるであろう。

(京都大学工学研究科地球系図書室 坂本拓,
九州大学附属図書館 星子奈美,
一橋大学附属図書館 菅原光)

グループC

「e-Scienceによるボーダレスな研究環境の構築を目指して～eSciDocを中心とした研究者の新しい発信の形～」というタイトルで2つのセッションが行われた。

「セッション①：MPDL（マックスプランクデジタルライブラリ）の概要～eScience時代の先進的な図書館～」では、MPDLの概要およびMPDLが行っている購読誌選択の分析手法について宇宙航空研究開発機構の藤井より紹介があった（図4）。

「セッション②：eScience—そのソリューションと利用者視点～利用者とシステムの一体的な推進～」では、MPDLが提供するe-Scienceソリューションの

図4 マックスプランクデジタルライブラリ (MPDL) の概要

図5 研究活動の理想スパイラル

目指す姿についての報告が科学技術振興機構の黒沢よりあり（図5），その後，欧州を中心に急速に進むさまざまな研究環境支援国家プロジェクト（研究データの永久保存と保証，活用ソリューション，ユニバーサルな研究者番号制など）を背景として，日本における電子時代の研究環境とその中で研究者が望む仕組み，それがe-Scienceによってどのように解決できるのか，具体案を提示しつつ，報告会参加者の図書館員と，研究者との白熱した議論が物質・材料研究機構の谷藤のコーディネートにより行われた。

（宇宙航空研究開発機構 藤井亜紀子，
科学技術振興機構 黒沢努，
物質・材料研究機構 谷藤幹子）

グループD

「学術情報流通における国家的プロジェクト，国際連携への取り組み～プロジェクトファンド，ナショナルライセンス，EU連携等について～」では，ドイツ

写真2 グループDの様子

ツ学術協会，ドイツ文化センターの担当者が，来場者の質問に答える形でブース設営をした。ナショナルライセンスに関する質問，オープンアクセスに関わる質問が多く寄せられた。

ナショナルライセンスに関しては，特にドイツでの資金提供について関心が高かった。オープンアクセスについては，今後の学術情報基盤を充実させていく上で極めて重要であるという認識のもと，独日の参加者の間で多くの意見が交わされた。

また，ヨーロッパ委員会の東京情報事務局であるEuraxess（http://ec.europa.eu/euraxess/links/japan/index_en.htm）から代表のレー・ヴールガー博士が参加され，日本とヨーロッパの間での研究者の交流プログラムを紹介した。かなり長期的で充実したプログラムが組まれているとのことであった。

（東京ドイツ文化センター 吉次基宣）

会場の関係で他のグループの声が届きすぎるといった場面が見られたものの，各セッションでは活発な質疑応答が行われた。会場で回収したアンケート集計結果（回収：17名，回収率：20%）によると，回答者の多くが興味を持っていたものは「デジタル化」「アーカイブ」「オープンアクセス」であった。また，同様のスタディーツアーが開催された場合，参加したい7名，所属機関から誰かを参加させたい2名，参加は希望しないが報告は聞きたい7名と参加者のドイツの図書館に対する関心の高さがうかがえた。

（科学技術振興機構 堀内美穂）